

江戸時代に作られた竹取物語絵の世界

—富士山の絵画化との関連から—

〈静岡県富士山世界遺産センター准教授／立教大学日本学研究所特任研究員 青木 慎一〉

江戸時代には奈良絵本・絵巻と通称される^{さいしき}彩色の絵本や絵巻をハンドメイドで作る店が京都に複数あったことが分かってきました。そこでは『伊勢物語』や『源氏物語』、『^{しゅてんどうじ}酒呑童子』、『^{ぶんしょうぞうし}文正草子』をはじめ、たくさんの王朝物語や御伽草子の^{おとぎぞうし}奈良絵本・絵巻が作られました。もちろん『竹取物語』もその一つです。本コラムでは、富士山の絵画化の前提となる竹取物語絵の研究状況や制作過程について紹介していきます。

注文に応じて作られる奈良絵本・絵巻の中で、『竹取物語』は特別人気だったというわけではありませんが、現在では70点を超える作品が確認されています。関東・関西・九州などの国内はもとより、ニューヨーク公立図書館やメトロポリタン美術館、オックスフォード大学、ケンブリッジ大学など、アメリカやヨーロッパにも所蔵されています。海外に渡った経緯としては、中国・朝鮮を含む東アジアや日本趣味の在外コレクターが買い付け、そのコレクションが公共機関で現在保管されているということになります。

このように世界各地にある竹取物語絵ですが、アイルランドのダブリンにあるチェスター・ピーティ・ライブラリ、立教大学図書館、國學院大學図書館の3館は、所蔵作品の質と数で特に注目されるどころです。

こうした作品を調査・研究するには、平成までは現地に行かなければならない場合がほとんどでした。しかし、デジタルアーカイブが整備されつつある令和の現在は、自室のパソコンで、さらにはスマホを操作するだけでも、貴重なコレクションが見られるようになっていきます（先に挙げたメトロポリタン美術館・オックスフォード大学・ケンブリッジ大学も作品の画像をweb上で公開しています）。

さて、ここで竹取物語絵における富士山の絵画化に話を移しましょう。伝存する70点以上の竹取物語絵のうち、富士山を絵画化した作品は私が調査したかぎりでおよそ8点、全体の1割ほどになります。天人がかぐや姫を迎えにくる場面や姫が月に戻る場面がストーリーとしてよく知られるところですが、絵においても^{らいごう}来迎や昇天をラストシーンとして描く作品が多く、『竹取物語』の結末である富士山に帝が使者を派遣する場面を絵画化することは珍しいのです。しかも、冒頭で述べたように絵本や絵巻はハンドメイドで作られるため、それぞれの作品を比べてみると、絵の細部に違いが見られることが少なくありません。富士山の場面の絵も、似たようなシーンを描く作品がある一方で、他に見られない絵を持つ作品も確認されます。

私たちは絵を見ていながら、実は物語のどのシーンが絵画化されるか、どのように描かれるかという問題にも接しているのです。今回のコラムでは、みなさんがよく知る『竹取物語』の最初の部分である竹取の翁がかぐや姫を見つけて養う場面の絵について、センターで所蔵する「竹取物語」（奈良絵本断簡）と立教大学図書館が所蔵する絵巻・絵本の4図を載せました（次ページ）。



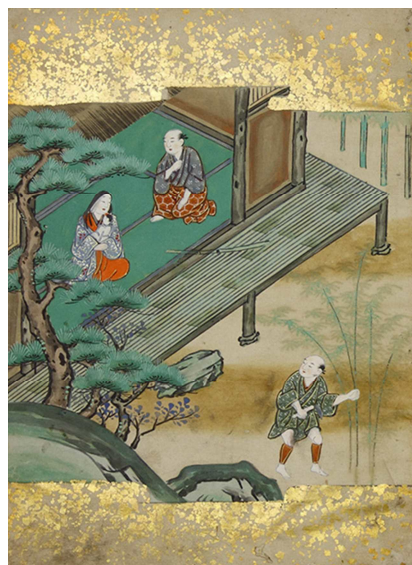
これらを並べて見ると、『竹取物語』のビジュアル化の仕方に違いが出ることが理解してもらえるはず。次に担当するコラムにおいては、富士山について語られる『竹取物語』の結末を取り上げ、物語のどの部分を切り取って絵画化するか、物語と絵の楽しみ方の違い、絵に描かれる富士山の意味などについて紹介したいと思います。



静岡県富士山世界遺産センター蔵
「竹取物語」(奈良絵本断簡)



立教大学図書館蔵
「竹取物語」(甲本)



立教大学図書館蔵
「竹取物語」(乙本)



立教大学図書館蔵
「竹取物語絵巻」

